
零崎雨織の人間風雨

匂宮拝武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎雨織の人間風雨

【Nコード】

N3329P

【作者名】

匂宮拜武

【あらすじ】

ここは、人類最強と人類最終が戦った歴史から、80年たった未来の話。

そこでは、今も昔と変わらずに、零崎一賊が人を殺していた…。

臆病とは、慎重と言つことと同意である。

臆病とは、無望と言つことと同意でもある。

…ここは、某都にある、某区…と言つても都の時点でどこかは分かるのであるが。

その某区の路地裏で、ある一人の少女が走っていた。

路地裏なので、誰もいないからいいのだが…その少女の風貌は、異様な雰囲気醸し出していた。

確かに曇り空で雨は降りそうな天気ではあるが…それにしても、赤色の雨合羽で身を包み、手には灰色の長い傘を持っていた。

そしてその少女は傘を握りしめながら、走りづらそうな長靴でペタンペタンと走っている。

「ッ……！イズ兄さんの馬鹿……！！なんで、『雨が降りそう』ってだけで私を送るんですかああ……！！」

少女は、そんな風にぶつぶつと言いながら必死に走り続けていた。

そして……突然少女の肩がビクリと震えたかと思うと、その場からいきなりジャンプする。

少女が今までいた場所のアスファルトが弾け、その後にはパンという音がする。

「……っつあーやりにくいですよ、本当にいー！錫識兄さん、ヘルプー……！」

そして、そのまま少女は走り去っていく。

だが、すぐにその少女がいた場所には、二人の男物の浴衣を着た少女が二人現れる。

「……全く、いい加減逃げても無駄だという事に気づかないのかな、なあアオネ藍音。」

「……全く、いい加減逃げても無駄だという事に気付いてほしいね、なあアカネ銅寝。」

その二人の少女は、赤と青という色の違いはあれど、それ以外は、鏡にうつしたような全く同じ容姿をしていた。

銅寝と呼ばれた少女はそう言いつつも、懐から棒に鎖をつけた物にその先端にトゲ付き鉄球をつけた武器：モーニングスターを取り出し、笑う。

藍音と呼ばれた少女も、そう言いつつ懐から筒状の革袋に砂をつめた武器：ブラックジャックを取り出して、同じような顔をして笑う。

「全く、80年前に全ての零崎は死んだというのに、また生まれてくるとは驚いたものだが…今の零崎三天王の一人があんな逃げ腰と言っことの方が驚きだな、藍音。」

「全く、80年前に全ての零崎は死んだというのに、ああいう逃げ腰だとは驚いたものだが…今の零崎三天王の一人があんなに貧弱だということにも驚きだな、銅寝。」

「今の零崎三天王はフルーティボイスン猛毒甘美とデットアイラブ慈愛系亡…そしてあのレイニーレイニー鮮血風雨…潔癖症と博愛主義者、そして好き嫌い…全く、さすがは全員が全員狂っている殺人集団だな、藍音。」

「今の零崎三天王は猛毒甘美と慈愛系亡…そしてあの鮮血風雨…潔癖症と博愛主義者、そして好き嫌い…全く、さすがは全員が全員狂っている殺人集団だな、銅寝。」

そこまで言っつと、二人は犯しオカそうに笑いあっつ。

「じゃあ、さっさと零崎を殺して私達の強さを早蕨サワラヒや本家に分からせてやるっつよ、藍音。」

「じゃあ、さっさと零崎を殺して私達の強さを早蕨や本家に分からせてやるっつか、銅寝。」

二人はそう言っつと、また走り出し、少女を追い始める。

「ハツ…ハツ…ハツ…もう、いやですう……。」

襲われていた雨合羽の少女は、そう言いながら涙目になって近くの壁にもたれる。

そして、呼吸を整えながら、恨みがましい様に呟く。

「いい加減…あの人たち、殺したいんですけどお…!!」

その言葉に含まれるのは、純粋な殺意。

少女の純粋な目には似合わない様な、純粋すぎる殺意。

殺す、ただそれだけの言葉を本気で言える者は、少なくない。

だが、それに本気の殺意がこもっているかどうかは…分からない。

それを心から本気で言える少女…いや、殺し名序列三位、殺人鬼集
団零崎雨織ゼロサキアマオリ…通称鮮血風雨レイニーレイニーは本気で人を殺せるだけの技術スキルを持っていた。

「…と言うか、なんで雨降らないんですかあ!!今日の降水確率は80%だったのに…!!なんですか、20%の逆境から曇りをつかみとつたんですか、雲お!!」

…彼女、零崎雨織は本来零崎の殺人鬼…狩る側である。その彼女がなぜ追われる側にいるのか…

「うう……こんなの、ちょっとかいた赫識君カクシキがすればいいのに

…姉さんは悲しいですっ！」

…今回の事についての説明をしよう。

といつても説明は簡単。零崎三天王である零崎雨織が自らやってきたのは、自分達家賊に危害を加えた愚か者がいた…ただ、それだけである。

危害を加えられたのは、現時点で零崎の一番末っ子…ブーメラン使いの零崎赫識。

危害を加えたのは殺し名序列一位、殺戮奇術集団・匂宮雑技団の分家《紅葉賀》出身…紅葉賀銅寝・紅葉賀藍音・紅葉賀忌祢。

雨織は零崎の長兄、零崎錫識と、最強とも言われる零崎、零崎愛識ゼロサキイトシキこの二人から「行って来い」と言われ、今回来たのであった…が。

…しかも、北海道から、だ。

零崎一賊の拠点は、北海道急殺島。元闇口衆の拠点、大厄島であり、それを奪った物が急殺島…そこを、零崎は拠点としているのだ。

もちろん雨織もそこからここまで来た訳であるが…

「…うう…故人いわく、【人が死ぬときには、必ず《悪》が存在する】…って言いますが、これで私が死んだら、完全に天気の子のせいですよねえ…。」

…彼女は、その自分の決めた制限ルールに則った限定的な殺人鬼。いくら報復のためとはいえ…その制限を破ることは、出来ないのである。

「はあ……いい加減、雨が降って欲しいところですけど……そこんところ、どう思いますか、お二人？」

…と、そこで雨織は唐突に自分の後ろに声をかける。

「…気付いていたか。さすがは零崎一賊が長女、零崎雨織だけのことはある。」

「…気付いていたか。さすがは零崎一賊が長女、零崎雨織だけのことはある。」

その声をかけた暗闇からは、二人の少女：紅葉賀銅寝と、紅葉賀藍音が出てくる。

「…そんなステレオ台詞、故人の言葉にありましたねえ……澁標の方でしたが……。」

うんざりした表情で、雨織は言う。

「澁標など、どうでもいい。これから、私達二人がお前を殺し、分家が本家よりも上であることを証明する。」

「澁標など、どうでもいい。これから、私達二人がお前を殺し、分家が本家よりも上であることを証明する。」

そんな雨織の言葉も気にせず、二人はそう言い放つ。

「…ああ、正当防衛は絶対【零崎を行う】ことには入りませんからねえっ！」

雨織は頭を振り、叫んだあとに自身の獲物……灰色の大きな傘、レイニーレイニーを構える。

「フン、今まで殺人鬼のお前が追われる側、私達が追う鬼側に立っているとは…皮肉なものだな。」

「フン、今まで殺人鬼のお前が追われる側、私達が追う鬼側に立っているとは…皮肉なものだな。」

そういうと、紅葉賀の二人は同時に自身の獲物…モーニングスターとブラックジャックを取り出し、構える。

「では、正当防衛でも始めましようかねえ…？」

そういうと、雨織はレイニーレイニーを竹刀の様に構え、二人を強く睨む…

「……全く…銅寝と藍音は何をやっている…こんなに長く時間がかかるとは、本当に馬鹿だな…。」

…ここは、雨織が襲われている路地から、数キロ離れた位置にある高層ビル。

そこで、一人の黄色いリボンをつけた一人の少女…紅葉賀忌祢が寝転がるようにライフルの標準を構えていた。

モリシツガキネ

紅葉賀殺し屋三姉妹、その三女…紅葉賀忌祢はライフル使い。基本的には、裏方の役割なのだ。

「…全く、もう見える位置には零崎はいないようですし…場所を変えますか……」

そういつて忌祢は立ち上がるうとする……。

が。

「……………っ!?!」

そこで、自分の体の違和感に気付く。

「体が……動かない……!?!」

自分の体が、指一本たりともピクリとも動かないのだ。

自分の相棒ともいえる武器、ライフル銃さえ動かない。

「…全く………こんなところにいたとは、全く驚いたね、イズ。」

「いえ、私は全く驚いていませんよ?ラブ。」

と、そこで後ろから二人の男の声が聞こえる。

「なっ……!?!」

かろうじて動く首と、なんとか動かすことのできる眼球を必死に動

かし、忌祢は後ろを見やる。

「さて、【紅葉賀】の少女よ。早速だが、零崎を始めてもかまわんね？」

「ハハハ…それは完全に決まっている事を聞くね、ラブ。」

そこにいたのは、礼服を着た長髪の男と、真っ白のジャンパーに黒い手袋、ピンク色のニツカポツカをはた男……そして、その姿を忌祢は知っていた。

「ぜ…零崎…！」

「おや、私の事を知っていたか。」

「まあ、知らない状態でこの仕事を受けたりはしないだろう。」

…そこにいたのは、最強の殺人鬼達^{零崎一賊}。

零崎一賊が長兄、奇野から生まれし零崎、^{フルーティボイスン}猛毒甘美…^{ゼロザキススシキ}零崎錫識。

零崎一賊最強の男…^{デットアイラブ}曲弦系使い、^{ゼロザキイトシキ}慈愛系亡…零崎愛識。

「なぜ…「こ」が…!?!」

「そんなことはどうでもいいと思わないかい？今から君は死ぬんだから。」

忌祢の疑問にも、愛識は全く取り合おうとしない。

「さて、私はもうこのビルにいる奴らでお腹いっぱいだからな…イ
ズ、ここは君に譲ってあげよう。」

「…ふむ、それはありがたいが…とりあえず、あの少女をこちらに
向かせ、ライフルも壊しておいてくれないか？」

愛識はそれに軽く頷くと、指を引っ引っと動かし、忌祢の体を動
かす。

「ッ…!!」

動かされるたびに、忌祢の体には激痛が走る。

自身の相棒ともいえるライフル銃も、愛識の曲弦系により、空中に
浮かびあがり…音も無く輪切りにされてしまう。

それを見た忌祢が、絶望していると…ゆっくりと足音を立てながら
錫識が近寄ってくる。

「…偶には、こういう殺し方も…嫌いではないな。」

「ま…待て…!!」

懐から、自分の獲物を取り出そうとしている錫識に、忌祢は必死で
命乞いをする。

だが、そんな忌祢をみた錫識は、とてもがっかりした様な顔になる。

「おいおい、そんな顔をするな。仮にもプロのプレイヤーがそれで
は、みっともないぞ？」

「いやだ…！私は…まだ…！！」

「やれやれ…こんなチンピラのような命乞いをする奴が【殺し名】にいるとは…時代も変わったな。」

そういうと、もう問答は無用と言う様に、錫識は己の獲物…罪口商会製の霧吹き、フルーティポイズンを取り出す。

「安心しろ、これは即死させる毒が入っている。慈悲を請うまでも無く…殺してやる。」

「ああ…！…あ…！…！」

忌祢の顔が、恐怖で歪む。

そして、錫識はそんな顔を見て、嫌悪するかのような表情になり、言う。

「汚ないな…私は、相手が一滴も血を流さないように殺すのを美学としている。それなのに、こんな顔の奴を殺すとは…。」

そっぴいながら、錫識は霧吹き…フルーティポイズンを忌祢の顔のすぐ前に構える。

「それでは…さようなら。」

「あ…！あああああああ…！」

忌祢の叫びも無視し、錫識はその引き金を…あっさりと引いた。

「ウン…のおッ!」

「チイツ…まだ抵抗するか、鮮血風雨!!」

「チイツ…まだ抵抗するか、鮮血風雨!!」

「当たり前でしょうがあ!!」

…先程の路地裏で、雨織と紅葉賀姉妹は、まだ戦闘を続けていた。

「ああもう…これ絶対刺突系とかの武器だと、レイニーレイニーが持ちませんよあ!!」

今までの戦闘で、零崎を行う訳にはいかない雨織は、防戦一方だった。

いくら相手がモーニングスターや、ブラックジャックを使ってきてもこちらは罪口商会製の特別品。

雨織が聞いた話では、レイニーレイニーに使われているのは、カーボンナノチューブや、ケブラー等の繊維らしい…そんな、特別製の布、さらには武器として使える物で防御に徹しては、そこからへの攻撃で敗れるはずはない。

「…今回の私達の仕事は、【罪口製の武器を持ってくること】…

罪口製の武器は、滅多にお目にかかれないが、情報で聞いたのは、人類最強の持つ零崎の遺品、ボルトキープと言うマラカス。そしてもう一つが…お前のレイニーレイニーだ。是非、受け取るうか。」

「…今回の私達の仕事は、【罪口製の武器を持つてくること】……罪口製の武器は、滅多にお目にかかれないが、情報で聞いたのは、人類最強の持つ零崎の遺品、ボルトキープと言うマラカス。そしてもう一つが…お前のレイニーレイニーだ。是非、受け取るうか。」

「絶対いやですつてえ！？私だつて、大切にしてるんですからあ！？」

それを聞くと、紅葉賀の二人は嫌そうな顔になる。

「呪い名ともつながりがあるとは…今の零崎は節操なしだな、全く。」

「呪い名ともつながりがあるとは…今の零崎は節操なしだな、全く。」

「昔だったら、古槍さんとか頼ったんでしようけどねえ…。」

「ふん…それは残念だった…なッ!!」

「ふん…それは残念だった…なッ!!」

そう雨織が言っていると、突然紅葉賀の二人は武器を構えて襲ってくる。

だが、それも無意味。

「おつとおー!？」

慌てつつも、雨織は傘を構えてその攻撃を見事に受け切り、そのまま受け流す。

「ああ…もういつそ逃げちゃた方が……………」

と、そこまで雨織が言った途端…雨織の動きがピタリと止まる。

それに、紅葉賀姉妹は不思議そうな顔になるが…上から、ポツリと何か落ちてきたことで、納得が言ったような顔になる。

「む…?…ああ、雨が降ってきたか…ちょうどいい、お前の血がこの雨で洗い流される。雨織という名前には風流かもな？」

「む…?…ああ、雨が降ってきたか…ちょうどいい、お前の血がこの雨で洗い流される。雨織という名前には風流かもな？」

紅葉賀姉妹はそう笑いながら言うが…二人は気付いていない。

自分達が、もう生き残れないという事を。

「さて…早速だが、そろそろとどめを…ッ!？」

「さて…早速だが、そろそろとどめを…ッ!？」

気を取り直したように紅葉賀姉妹がそういうと…雨織がゆっくりと傘を構える。

「なんだ…やっとなる気になったか、鮮血風雨…ッ!？」

と、そこまで言った時、雨織はこちらに跳びかかり…藍音の喉を傘で貫く。

「あ、藍音ッ!？」

「…フフフフフフフフフフフフウフフフ…ああー…ずっと待ってたんですよお？雨が降るのを…。」

いきなり、自分の姉妹を殺された銅寝は動揺するが…それを全く意に介さず、雨織はニイイッと口を歪ませて、笑う。

「な、お前…なぜ、いきなり…!？」

「なああんだあ…知らなかったんですかああ？」

ゆらりと、雨織は糸の切れた人形のように銅寝の方を振り向く。

「私の、【零崎を行う条件】…教えてあげますよお。それは…

…【雨が降っていること】…ですっ。」

「なんだ…それは…?!」

…そう。雨織の【零崎を行う条件】は、【雨が降っていること】。

それは、昔の零崎三天王の一人、【少女趣味】ホルトキープこと零崎曲識ゼロザキマカシキの様な限定条件。

「ずっと我慢してたんですから…嬉しいですよお？」

ニマリと、雨織は笑いながらレイニーレイニーにぶら下がっていた肉塊…藍音…だったものを投げ捨てる。

「さあ、零崎を始めましょお…!!」

そういうと、雨織はレイニーレイニーを槍の様に構え、銅寝に向かって走ってくる。

「ひっ…!!うわあああああ!!!!」

恐怖にかられた銅寝は、ぶんぶんとモーニングスターを振り回す。

だが、いくらそんな状態とはいえ殺し屋。正確に人体の急所を狙い、モーニングスターを振り下ろそうとした…が。

「遅いですねえ。」

「ッ!?!がああッ!!」

雨織は、あっさりとレイニーレイニーの柄のボタンを押し、バツと傘を開き、仕込まれたいた千本を飛ばす。

その千本の雨あられを喰らった銅寝は、とつさに顔を腕でガードしたが…何本のも針は腕や胴体に刺さってしまう。

「くっ…!!」

「ああ、抵抗はしないでくださいねえ? 錫識兄さん特性の毒塗ってありますし、もう、面倒くさいですからあ…?」

そういうと、雨織は傘を元の状態に閉じ、首筋にあてる。

「な…にを…!？」

「私の傘、実は布の部分にダイヤモンド粉末とか言うのを仕込んでいて…鋸みたいに出来るんですよ。」

笑顔でそう言う雨織に、銅寝は恐怖の感情を隠しきれない。

「や…め…!!」

「アハハア…それでは……零崎を、終わりましたよ…。」

銅寝が最期に聞いた音は、雨織の笑い声と…ただただ振りつづける、雨の音だった。

「ぴっちぴっちちやっぶちやっぶうー」

雨織は、鼻歌を歌いながら、紐を結んでいた。

「いやー、久々でしたから、楽しかったですねえ…」

雨織は殺したあの紅葉賀姉妹の事を考えながら、楽しそうに紐を結び、つるしていく。

「……………何をやっているんですか、レイ？」

「…おっと。錫識兄さん、お久ですう。」

と、そこで後ろから聞き慣れた声が聞こえるので、雨織が振り向くと…そこには、自分の兄である零崎の殺人鬼、零崎錫識が立っていた。

「いやあ、今日は二人殺しましたから、いつもの奴をお」

「…全く、その趣味は私には理解できんな…全く、汚ない。」

錫識はそういうと、自分の懐から霧吹きを取り出し…消臭剤と消毒液を雨織に降りかける。

「わっぷ……兄さん、相変わらずぺっぺきですねえ。」

「それを言うなら潔癖だ…全く、さっさと帰るぞ。へりもチャータしてあるからな。」

「あ、はーいい」

雨織はそう返事すると…紐を首に吊るし、頭から白い布をかぶせた、二つの人間ほどのなにかを逆さにして近くの壁につるす。

「…よしっと！雨が降りますようにい…。」

雨織はそう拝むと、すぐに振り向き…錫識に向き直る。

「さー行きましようか、兄さん！」

………彼女の名は、零崎雨織。

零崎の歴史の中で、女性でありながら最も大量の人間を殺した零崎である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3329p/>

零崎雨織の人間風雨

2010年12月6日04時43分発行